

句
遊

第七集

平成十七年三月

序に代えて

生 江 沢 広 雄

このたび「句遊」第七集を刊行することとなりました。

これはひとえに、句遊会全員の努力の賜物と、ご同慶の至りであります。

本句集は、御高承のとおり第一集を平成五年三月に刊行し、以来二年単位で発行を続けて参りました。今回は平成十五年及び平成十六年の二年間の作品が対象となり、各人の自選による十八句を掲載いたしました。

「句遊会」は、宗匠を置かず、句会を中心にして、遊びと親交とにより俳句を楽しむという運営方針をとっております。

従って、句柄も勝手気儘で極めてバラエティに富んだ句集であると言っても過言ではないと言えると思います。

俳句には、又「俳号」を自分で自由に選ぶ楽しみがあります。

「俳号」とは、俳諧の作者として用いる雅号で、これには滑稽とかおどけという意味もふくまれます。

われわれ会員にもいろいろな「俳号」が見られます。

「田貫」(タヌキ)、「素童」(素人のワツパ)、「喜双」(双葉のように若い)、「泰亀」(大器晩成)、「駿介」(犬の名前)等々。

又名前そのまま「俳号」として立派に通用する羨ましい人もいます。

「豊太」、「弘道」、「ゆうじ」、「至剛」、「申」、「静」等々。

「俳号」を考えることも俳句をたしなむ楽しみの一つでしょう。

この句集の中に一句でも皆様のおめがねにかなうものがあれば、これに過ぎる喜びはありません。

(付 記)

平成十五年、十六年度句遊会の活動状況

月例会：平成十七年三月が第一八〇回

写友会、画友会との合同展　：平成十五年十月

同　　同　　平成十六年九月

吟行句会：平成十五年 四月 靖国神社

平成十五年十一月 明治神宮

平成十六年 四月 千鳥ヶ淵

平成十六年十一月 新宿御苑

目次

梅雨晴れ間	花筏	梅一枝	初日の出	青嵐	早春賦	貴晩晴	さくらんぼ	蔵屋敷	冬東風	箱根の四季(七)	母の郷	家族のことなど	帰りの花	天変	屠蘇一献
六川二郎	向井三丁目	宮川至剛	宮川弘道	三宅申	藤川道夫	林泰亀	生江沢広雄	中路素童	田中保一郎	武井治	清家静楓	眞田宗興	佐藤政百	岸民次	石野喜双
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
三六	三四	三二	三〇	二八	二六	二四	二二	二〇	一八	一六	一四	一二	一〇	八	六

作

品

五

屠蘇一献

石野喜双

屠蘇一献ゆつくり生きてみたいもの

梅の寺手提げの葷酒いかにせむ

春潮に明石・鳴門の響き合ひ

出会ひより別れの多き彼岸かな

魂籠る万朶の桜今年また

人波も堤ざくらもうねりゆく

子の未来われには余生夏帽子

はな唄で歩く五月のシャンゼリゼ

江戸湾の光り千金すずみ船

白き指浴衣の襟を合はせけり

菊花展赤白黄の園児帽

大喪のありし御苑に菊薫る

晚鐘を聞きつ北山しぐれかな

行き過ぎてまた戻り買ふ歳の市

恩寵の光よ鐘よ聖夜祭

若さとは餅早喰ひのバカさかも

レジを待つ籠より長き葱の束

枯野バス独り童謡口遊む

天 変

八

岸 民 次

せせらぎに魚きらめく芹の陰

釣り竿に静かな当り春の潮

菜畑や色織りなせる山の裾

友眠る千鳥ヶ淵に花万朶

幾年とバラ咲く家も壊しけり

酒うまし薬味選んで初鰹

着ますかと妻の尋ねる古浴衣

七夕の星探し合ふ若夫婦

天変の今年もよくぞ鬼やんま

幼き日稲田何處まで蜻蛉釣り

柿熟れて尾羽ふるわせる雀たち

娘の嫁ぎ残る聖樹に灯を入るる

帰
り
花

佐
藤
政
百

初日受け森羅万象変はりゆく

梅満ちて大名気分の偕楽園

菜の花は夕日浴びてる息してる

花吹雪又吹雪来る去りし恋

水面に雲透き通る五月かな

音もなく四方迫り来る走り梅雨

螢火の飛跡の残像闇深し

七夕竹恋の願ひの見えかくれ

炎天下発破轟く鉄鉞山

竿に舞ふ鯨ダブルだ光る海

日暮待ち草むら虫のシンフォニー

遠つ世の火の山妙義紅葉かな

木洩れ日の椎の実踏み行く御苑かな

秋冷の浜に人なく小蟹の目

地面染め山茶花散りて散りてなほ

きみを待つ街路つつじの帰り花

搗く汗に母手返しの辛み餅

荒ぶ世の路地にやすらぎ冬椿

家族のことなど

眞田宗興

成人の日に妻の髪染めをりて

春風をつまんで妻は料理する

少年の日にこの路にからたちが

孫ときて赤青黄色赤が好き

新緑や肋骨切除の父遠し

母と歩む曾て江古田の麦畑

胸騒ぎ鎮めて梅雨に読書する

二階から歩一步降りきて妻の夏

かまきりや夏やせせんかと母想ふ

住宅街一本の桑茂りをり

母おはす去年ありし所ありし夏

草ぼうぼうの家から腕白飛び出せり

お祖母さんお父さんまた彼岸花

しみじみと天空の月歳なりや

大作りの菊やこのあと如何ならむ

年の瀬や線路を支へる小石あり

枯草やこの世に生きた事実あり

孫の手や玻璃に残りて年を越し

母の郷

清家静楓

一畝の麦踏み残し夕日落つ

幼稚園みんな手製の雛祭り

朱文字の墓石の建ちて彼岸入り

風止みて木の芽起こしの雨の音

行く春や棚田の里の夕間暮れ

麦秋の里まで続く段畑

紅の極まり黒の混じる薔薇

ひとつだけ追へば螢火すつと消え

母の郷祭囃子に午睡かな

銘柄を聞きて冷酒もう一本

背伸びして七夕紙を結ぶ子等

夕立の止みて木下の乾きかな

町工場夜なべ人影揺れる窓

どの家も柿色付きぬ奈良の里

秋冷やきざむ包丁リズム音

閉鎖せし保養所跡の帰り花

行く年を惜しみ外湯の梯子する

著ぶくれてやけに手足の縮まりぬ

箱根の四季（七）

一六

武
井
治

年の功一番風呂の初湯かな

春寒し臨時募集の長い列

東風来る山家の軋戸開く音

春潮のまぶしさ飽かず駿河湾

菜の花や紺の野良着が良く似合ふ

事古りし戦友への思ひ花の下

靖国の戦友よ集れ花の中

うず高き落葉動かず花曇り

幾何いくばくの余世緑の旅に出る

孫娘薔薇を銜くはへて初舞台

モネ画く睡蓮が好き雨意迫る

門火焚く村に哀しき物語

星祭り襟元正す孫娘

残暑まだ続きさうなり赤い月

秋冷や富士を離るる雲一つ

参道にどんぐり拾ふ子の笑顔

老夫婦嫁に守られ年の市

枯野行く凡人の暮し真実あり

夕 東 風

一八

田 中 保 一 郎

目と目合ひ思はず笑顔春着の子

男坂犬と登るや梅薫る

夕東風や魚のとびかふ相模川

まんさくの咲くも待たずに友逝けり

梅散りて桜待つ日となりにけり

手のひらに桜花びら戦友偲ぶ

窓開けて窓の明るき五月かな

病院の帰り急がず若楓

青嵐森の木霊を呼びにけり

炎昼や点滅にぶき信号機

日に映えて睡蓮赤し水澄めり

海に来て松見て帰る夏の果

枝豆や星なき空にひとり酌む

今日もまた突堤にあり鯨日和

廻り道してひと叢の曼珠沙華

裸電球煌々とあり年の市

モネの絵を残して置けり古暦

影走る鴉と鳩や冬日和

蔵屋敷

中路素童

藪入が死語となる日の六区行く

老梅や終の生命の紅極む

頭師かしらしの筆細やかに雛の眉

招魂の白き鳩舞ひ花散りぬ

婚の楽十字架に響き聖五月

重なりて寂光に透く若楓

青嵐上人像の端座して

翁凜と祭浴衣の心意気

鉄骨の十字架灼くるグラウンド・ゼロ

風立つと木の香木の声秋の声

切石に蜻蛉の憩ふ木場の跡

産土神に地の声のごと昼の虫

秋暑し煩惱止まぬ新老人

手に受けて秋水となる神の水

秋冷や血族継ぎし蔵屋敷

鷹匠の巢山に籠る木曾の秋

地震な続く町に縁なきクリスマス

餅捏ねる女の腕火照りゆく

さくらんぼ

生江沢広雄

四海波おだやかならず謠初め

しみじみとさらにしみじみ初湯かな

静かさや人なき谷戸に梅ひらく

馬踏むな畦に顔出すつくしんぼ

東風吹かば天神の絵馬溢れけり

益二郎像上野の花を睨みけり

陶棺の静まりましぬ著莪の花

温暖化根津のつつじも咲き終り

列を組む托鉢僧や若楓

梅雨の月棚田に水の輝けり

甘き水何処にありや螢狩

さくらんぼ勝手気ままに皿の上

緑陰や犬の添ひ寝に風そよぎ

枝豆のさやより出でて輝けり

湘南に寂莫の風残暑かな

釣り上げし眼玉さびしき鯨の顔

古寺やひとり燃え立つ百日紅

ほの暗き当麻曼陀羅時雨来る

貴 晩 晴

二四

林 泰 亀

瀬戸内の島々巡る春の潮

大いなる神の摂理や春は来ぬ

菜の花のつぼみも浮かぶ味噌の椀

元気よく夢を与へよ春うらら

五月晴れ独身寮は布団干し

対座して膝の眩ゆき衣替え

炎天下銃を担ぎしこともあり

蟻地獄修羅の巷かバグダット

箱根路や茜に染まる雲の峰

虫の声灯消して聴く夜かな

釣果あり昨日も今日も鯨、鯨、鯨

小走りに母を追ふ子や案山子の目

お月見や赤々と燃ゆ星もゐて

小夜嵐金木犀は散りにけり

黙々と辿るボツカの背に時雨

葱の畝つづく彼方に妙義山

師走の夜ピーポ・ピーポの音走る

遠き日やきよしこの夜クリスマス

早春賦

二六

藤川道夫

好きな子に菱餅をやる雛祭り

梅の白泰然と東風に吹かれ居り

東風吹くや幹黝々の白梅に

所望されおかみの歌ひし早春賦

菜の花や帰りはぐれし蝶一羽

招魂祭健在だった猿の芸

碧眼もまじる九段の花見酒

花吹雪大川土手を撫でて過ぎ

明るさが風に揺れ居る若楓

青嵐や子の背に光るランドセル

納涼会の人去り校庭闊広し

干し物を抱いて取り込む遠き雷

誉めてくれた人にコスモス切ってやり

秋冷や床屋に近き喫茶店

葬^{そう}斂^{れん}の列に無言の案山子かな

年の市大物が売れて太鼓鳴り

銀座裏蛇の目の通る時雨かな

飲み忘れの薬を捨てる年の暮

青 嵐

三宅 申

客去りて先づはしづかに初湯かな

お転婆の娘のはんなりと春着かな

大江戸展出て大江戸の余寒かな

水玉のネクタイ選ぶ春の宵

明放つ寺の座敷や若楓

甲斐路より信濃に入れば青嵐

蟻の道歩みていつか傘寿なる

日本海夕焼を背にゴジラ岩

さはさへと空に向かひて今年竹

庇より不意に舞落つ秋の蝶

コスモスや落人村のざんざ降り

霧の妙義仙境魔界いづれとも

砂風呂に無念無想や秋澄める

秋冷の雲一筋の八ヶ岳

拭はれし空の深さよ谿紅葉

子の夢の空に舞ひゐる聖夜かな

留守居してついうとうと冬の蠅

遠き日の母の葱汁匂ひけり

初日の出

宮川弘道

観音像拝みてをれば初日の出

三つ池の枝垂れ桜や三分咲き

花愛でて若き二人のボートこぐ

行く春や四万十川の沈下橋

曇り日や気に向くままに薔薇手入

等々力の溪流豊か木下闇

老鷲の一声ありし高野山

木から木へとぶ筏師や雲の峰

放流のダムの生みたる秋の虹

五浦や老いし松にも新松子

秋燈下ワルツを踊る老夫婦

まな裏に父母の貌あり曼珠沙華

早起きの小鳥の増えし森深し

富有柿ついでむ目白増えにけり

石切場音絶えてより雫ふり

琴の音や今を盛りの紅牡丹

老いて知る人の情けや福寿草

琴の音を聞き入るごとし寒牡丹

梅 一 枝

宮 川 至 剛

梅一枝伴に明治の人逝けり

母九十梅の一枝を亡夫に添へ

菜の花や遠く疎開の室戸浜

わだつみの声とただよう花筏

花筏よどみて桜薬や降る

薔薇の香に酔ひて妖しき夢となる

母九十一葉一葉の草むしり

仰ぎ寄る新樹は枝に風抱きて

雲の峰いよいよ高し我航くも

丈あまし杖ひく人の宿浴衣

七夕や笹竹ひそか峡の町

鬼やんま一瞥くれて峠こゆ

甕の間は翳りて安きいとどかな

コスモスや草軽電鉄跡にゆれ

追分の澄む水音の風と来る

捨案山子舟につまれて潮来かな

山柿や空の蒼さをあつめたり

草の絮とぶや一輛ローカル線

花 筏

向井三丁目

晩学も三歳みとせとなりて初句会

さらさらと木の葉しぐれや山の道

春潮や漁火遠く城ヶ島

枝揺れず香のゆれて枝垂梅

野も山も息吹き始めて山笑ふ

さざなみの立ちてたゆたふ花筏

たんぽぽや人待ち顔の女の子

テノールの声透きとほる聖五月

いま生きるこの幸せや新茶汲む

激辛のカレーピリリと梅雨に入る

投げ入れの白滋の壺や夏来る

透きとほる空昇りゆく雲の峰

道問へばあの角曲がり白木槿

三欲をさらりと忘れ翳雲

鯖雲やここは奥能登行き止まり

餅つきて老を重ねていまむかし

ふりむけばただ風の声冬ざるる

風の声さざわさざわと枯野道

梅雨晴れ間

六川二郎

初日さす良き年ならむ酒も佳し

春潮や村上水軍いざ船出

湯の香してつるし飾りの雛の里

此岸よりいつの日渡る彼岸かな

たたら踏む御輿続々三社祭

老鶯のまつとうに鳴く遊歩道

生き生きて飲み且つ喰らふ花の下

満開の花の下にて無我となり

菜の花や黄色で勝負花仲間

葉桜の影広々と癌告知

古浴衣三枚かかへ入院す

短夜の重たき夜を蹴とばして

ゆつくりと点滴落つる梅雨晴れ間

食ふて寝て梅雨空眺め病床人

梅雨晴れ間光堂にも陽の光

退院をつくつく法師に迎へられ

いざ出番ポインセチアの居場所よし

搗き立ての餅の醍醐味おろし餅

あとがき

『句遊』第七集をお届けします。

十年一昔と言いますが、丁度、創刊十二年目になりました。

本集への出品は十六名で、前集より四名の増となりました。ただ、まことに残念なことですが、武井治さんが平成十六年十二月十八日に逝去されました。武井さんは、「句遊会」発足以来のメンバーでした。

謹んでご冥福をお祈りするとともに、遺句を本集に載せることとしました。

吟行句会は、平成十五年、平成十六年、それぞれ二回行いました。今後もできるだけ増やそうと思っております。

編集に当り、出品は従来同様、自選十八句とし、また前書き、ルビは原則としてつけぬことといたしておりますのでご了承下さい。

次集第八集は平成十九年を予定しております。会員の皆様の一層のご清吟をお祈りします。

編集委員

石野 喜次
佐藤 政夫
中路 良昭
生江沢 広雄

平成十七年三月

(中路 良昭記)